

明日香村ホラント遺跡発掘調査 記者発表・現地説明会資料(2003年5月17日)

調査機関	奈良県立橿原考古学研究所
所在地	高市郡明日香村大字阿部山(あべやま)
調査期間	第1次:平成14年11月11日～同年12月26日 第2次:平成15年4月1日～現在調査中
調査原因	ふるさと農道緊急整備事業(高市地区)
調査面積	第1次:280㎡(平米) 第2次:150㎡(平米)
主な遺構	飛鳥時代後期:石敷遺構、基壇状遺構、柱穴 その他の時代:柱穴、土坑、溝など
主な遺物	蹄脚硯、円面硯、墨書土器、鉄釘、土師器、須恵器など
現地説明会	2003年5月17日(土) 午後1時から午後16時(説明は、13時・14時・15時の3回)

1. 調査の経緯

高市地区のふるさと農道緊急整備事業に先立ち、昨秋、奈良県立橿原考古学研究所は事前調査を実施した。この調査で飛鳥時代後期の石敷遺構を発見し、周辺の小字からホラント遺跡と名付けた。これを踏まえ、昨年度末に工事施工の際、立会調査をおこなったところ、再び石敷遺構を検出した。遺構部分を保存するために遺構の性格と範囲確認が必要であったことから、工事を一時中断し、発掘調査を実施することとなった。遺跡の重要性から、県農林部耕地課と中部農林振興事務所の理解と協力を得て、検出した遺構は当初の計画を変更して保存されることになった。

2. 調査地周辺の地理的環境と遺跡

遺跡周辺の遺跡を概観すると、古墳時代には、ホラント遺跡周辺の尾根筋に古墳時代後期の円墳が散在するほか、南西には渡来系の遺物が出土した清水谷遺跡がある。しかし飛鳥時代の遺跡は、周辺にキトラ古墳や森カシ谷遺跡はあるものの、ホラント遺跡のある谷筋は今まで踏査以外に調査されておらず、遺跡の存在すら知られていなかった。ホラント遺跡は高取町大字上子島と明日香村大字阿部山との境、高取山塊から派出した東西方向に伸びる尾根の南斜面に位置し、南側には高取川が流れる。そのため調査地周辺は北から南に下る斜面地となっている。

3. 調査の概要

(1) 調査1区

石敷遺構を検出した調査区は、東西24.0m、南北10.0mで調査面積は約140㎡(平米)である。遺構面の標高は北端約149.5m、南端約148.5mで、約1mの標高差がある。石敷遺構1・2、基壇状遺構を検出した。これらは出土土器から、7世紀後半(650～675年)の遺構と考えられる。

石敷遺構1は、調査区東側に位置する。東西約6.5m、南北約4.5m以上を残し、直径約25cmの河原石を敷きつめた石敷遺構である。東辺に石垣状の石積みをし、その上面に石を敷く構造である。石積みは南側で4石、0.8mの高さがあるが、小口面をそろえない雑な作りである。出土

遺物には、土師器、須恵器がある。

基壇状遺構は、石敷遺構1の西側に位置する。東西5.0m以上、南北6.5mの方形と考えられ、北辺に張り出し部がとりつく。東辺では約0.15mの高さで河原石を立て並べ、その外側に直径約30cmの底石を敷き並べている。北辺では側石・底石はなく、そのかわり深さ約0.2mの溝の中に川原石が入れられ、上面には長辺約50cm、短辺約30cmの川原石が並び置かれていた。この溝は土層の観察から、基壇状遺構に伴う排水溝の可能性がある。張り出し部は北辺より一段高く設けられている。東側のみ検出したが、抜き取り痕の存在から、幅約4.0mの張り出し部を復原できる。出土土器には、土師器、須恵器のほか、墨書土器がある。

石敷遺構2は、基壇状遺構の下層約0.6mにあり、東西辺約5.5m以上を残す。供伴する遺物はほとんど無いが、土層の観察から石敷遺構1と同時期につくられたことがわかった。出土遺物は、遺構に直接伴わないが、蹄脚硯の脚部がある。

調査1区の石敷遺構・基壇状遺構は、土層観察の結果、[1]石敷遺構1と石敷遺構2の併存する時期、[2]石敷遺構2を埋めたてて、整地した後に基壇状遺構がつくり、この段階にも露出していた石敷遺構1と併存する時期の2時期があったことが明らかになったが、時期差は短かったといえよう。

(2) 調査2区

調査区は東西37m、南北4mで、調査面積は約150m²(平米)である。遺構面の標高は北端約151.5m、南端約151.2mで、標高差は約0.3mである。石敷遺構3と、それに伴うに伴う柱列などを検出した。これらは出土土器から、飛鳥時代後期(7世紀後半)の遺構と考えられる。

石敷遺構3は、東側の一部と西側が破壊されているものの、東西17.0m、南北3.0m以上を残す。石敷の南端には側石が北に面をむけて1列、高さ約0.15mの高さで立て並べられる。一部、面を南にむけた側石が立て並べられた部位があり、その部分のみは南側に底石を敷き、さらにその南側に石を置いた痕跡がある。幅約40cm、高さ25cmの川原石である。石敷遺構3は東西方向に石の目地が通り、柱穴の周りは柱を囲むように石を置くなど、計画的に石を敷いたことが明瞭である。

柱列は、石敷内で一列を確認した。柱穴は掘方が1辺約1m、柱根約0.25mのもの(古)と、一辺約0.6mで柱が抜き取られたもの(新)の2種類がある。柱間は石敷遺構外ではともに約1.8mだが、石敷内では約2.0~2.1m間隔で、若干の違いがある。柱の新旧関係から1度の建て替えがあったといえる。柱列は石敷遺構の東側にも続いていることから、石敷遺構が実際にはさらに東に広がっていた可能性がある。出土遺物は、土師器や須恵器、円面硯がある。

3. まとめ

ホラント遺跡の石敷遺構は、出土土器の年代から7世紀後半と考えられ、石敷遺構Ⅰ～Ⅲ・基壇状遺構が関連性をもってつくられたのは明らかである。石敷遺構は、飛鳥京跡・石神遺跡・酒船石遺跡・飛鳥稻淵宮殿跡・豊浦寺下層遺構などの公的な施設で検出される特徴がある。ホラント遺跡も、公的な施設または有力氏族の居宅の一部と考えられる。このような遺構が飛鳥の中心地から外れた地域でも存在したことは、飛鳥時代の支配者層の実態を理解するうえでも重要であろう。ホラント遺跡は広範囲におよぶ可能性が高く、調査地北側の阿部山地区、南側の高取

町上子島地区にもどのような遺構が存在するか、はかりしれない。

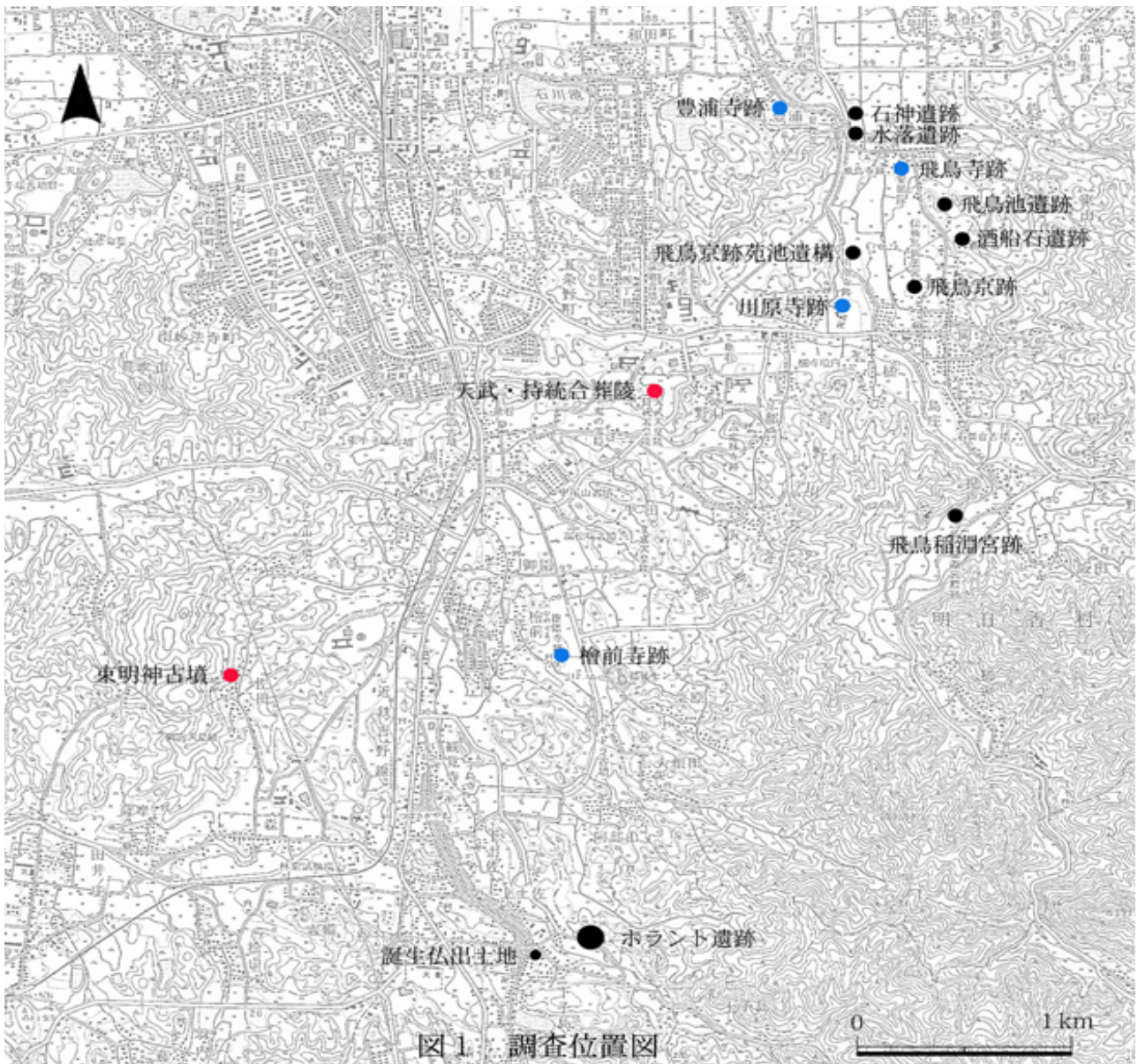
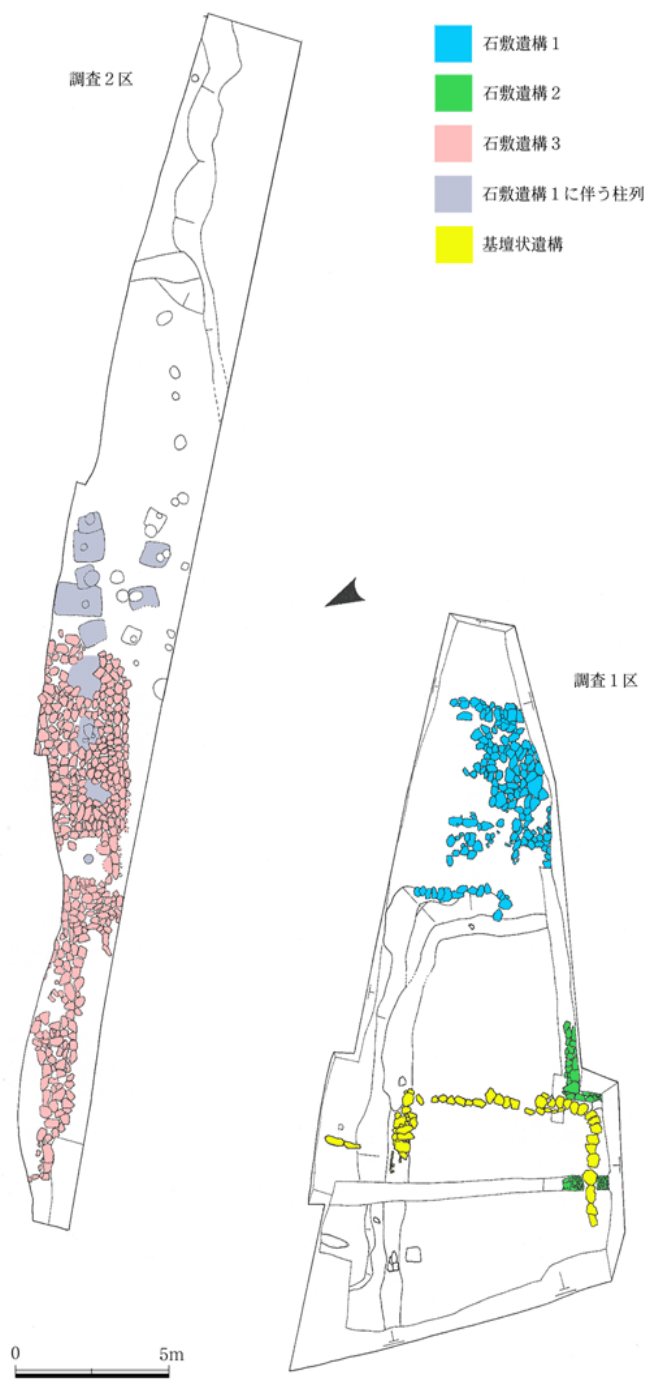


図1 調査位置図
遺跡の位置

「国土地理院発行 1/25,000 地形図（畝傍山）を使用」



遺構配置図



写真1 調査地遠景(南から)



写真2 調査1区(東から)



写真3 基壇状遺構(北から)



写真4 調査1区(西から)



写真5 石敷遺構1(西から)



写真6 基壇状遺構と石敷遺構2(南から)



写真7 石敷遺構3と柱列(東から)

本資料は、奈良県立橿原考古学研究所嘱託松井一晃が作成した。